

チーム医療の指標と心得

○質が高く、安心・安全な医療を求める患者・家族の声が高まる一方で、医療の高度化・複雑化に伴う業務の増大により医療現場の疲弊が指摘されるなど、医療の在り方が根本的に問われる今日、「チーム医療」は、我が国の医療の在り方を変え得るキーワードとして注目を集めている。

○患者を中心としたより質の高い医療を実現するためには、1人1人の医療スタッフの専門性を高め、その専門性に委ねつつも、これをチーム医療を通して再統合していく、といった発想の転換が必要である。

上記は平成22年2月18日、厚生労働省医政局医事課主幹で行われた第10回チーム医療の推進に関する検討会における配布資料、「チーム医療の推進に関する基本的な考え方について（素案）」より抜粋したものである。

病院がチーム医療を推進しようとして、複数の専門職を集め、この内容でチームを作って診療してください、と委任してもまらずまいかない。まずは、チームが活動しやすくするためのバックアップがあるか、あるかどうかはチームメンバーにはすぐ伝わる。続いてメンバー個々の資質も問われ、プロフェッショナルの自覚があるかである。

バックアップ体制を測る指標として、下肢静脈血栓予防のフットポンプの数、中心静脈挿入用エコーの台数、プロフェッショナルの自覚の指標として専門職の勤務日以外の院外研修の回数、勤務時間外の院内研修の回数を挙げたい。医療を安全にするが直接医療費につながらない機材をいかに整えるか、プロフェッショナルになるために専門職個人個人がいかに切磋琢磨するか、これらが指標になり得るのではないかと思う。

○今後、チーム医療を推進するためには、①各医療スタッフの専門性の向上、②各医療スタッフの役割の拡大、③医療スタッフ間の連携・補完の推進、といった方向を基本として、関係者がそれぞれの立場で様々な取組を進めていく

必要がある。

○なお、チーム医療を進めた結果、一部の医療スタッフに負担が集中したり、安全性が損なわれたりすることのないよう注意が必要である。

再度「チーム医療の推進に関する基本的な考え方について（素案）」より引用したが、チーム医療遂行は、チームスポーツに似ている。攻撃とディフェンスがあり、作戦がある。カバーリングや声かけなどコミュニケーション能力が問われる。リーダーシップが必要で、相互にチームメンバーの能力の把握、役割分担が理解できており、状況把握のなかで自分の行動が決定できる。個々の負担を把握して、分担する。チームスポーツは練習を重ね、より強くなる、時に勝利という達成感があり、同じ時間を共有した満足感がある、苦しいけれど、苦しかったけど楽しかったと思える。

チーム医療の遂行においても、チームスポーツと同じ能力が問われ、チームでの活動が苦手だったり、上記したチームスポーツの心得を理解しよとしなかったりする人は、残念ながら適さないようである。よりチーム力を上げるには、個人の努力とともに作戦会議や反省会が必要で、チーム医療の心得を理解・再確認するためには、チームによる実戦型研修が必要である。疲弊感が漂う忙しい医療現場にて短時間で楽しく理解できる、効率的な研修が必要である。大森病院医療管理部では、この研修として「茶番劇によるチーム研修」を推奨しているが、このような研修がなされているかどうか、チーム医療の指標となり得るだろう。

病院におけるチーム医療を推進する業務にあるが、チーム医療の結果として、メンバー個々に最終的に得られるものが、達成感や満足感であって、あの頃はとても忙しかったが、大変であったが、とても楽しかったと言ってもらえれば幸いである。

(大森病院医療安全管理部部長：渡邊正志)